

**Contents** \*\*\*\*\*

特集：前代未聞の 2016 年共和党大会	1p
<今週の The Economist 誌から>	
” The dividing of America” 「分断されるアメリカ」	7p
<From the Editor> 中道政治は難しい	8p

\*\*\*\*\*

**特集：前代未聞の 2016 年共和党大会**

今週はオハイオ州クリーブランドで共和党大会が行われ、ドナルド・トランプ氏が正式に大統領候補に指名されました。副大統領候補には、マイク・ペンス知事（インディアナ州）が選ばれました。これで来週は、ペンシルバニア州ピッツバーグで民主党大会が開催され、ヒラリー・クリントン前国務長官が指名を受けることになる。その先は間もなくリオ五輪が始まるので、米大統領選挙はしばし中休み期間となるでしょう。

2016 年は驚くことの多い年ですが、何と云っても今年の米共和党には驚かされっぱなしです。今回の共和党大会も、前代未聞の事態がいくつも起きています。クリーブランドの「トランプ劇場」を同時進行で描いてみました。

**● 共和党「後継者決定ルール」の変容**

予備選挙で意外な大統領候補者を指名するのは、普通は民主党の専売特許である。史上初のカトリック信者大統領（ケネディ）も、史上初の黒人大統領（オバマ）も、それから州知事を 1 期やっただけのピーナッツ畑の農夫さん（カーター）という例もあった。

逆に共和党側は番狂わせが少ない。少なくとも 20 世紀まではそうであった。第 42 代ビル・クリントン大統領の選挙参謀を務めたディック・モリスは、回顧録『オーバル・オフィス』の中で、共和党王朝の「後継者決定ルール」をこんな風に説明している。

- ① 予備選で 2 人が激戦となったときは、勝った側が大統領選に挑む。
- ② それで失敗した時は、2 位だった候補者が次の機会に挑戦する。

恐るべきことに、この2つの法則だけで過去の共和党の候補者選びのほとんど説明がついてしまうのである。

**1976年**：予備選でフォード大統領とレーガン知事（カリフォルニア州）が対立してフォードが勝利（法則①）。だがフォードはカーター元知事（ジョージア州）に負ける。

**1980年**：今度はレーガンが候補者になり（法則②）、大統領に当選して2期務める。

**1988年**：ブッシュ Sr.副大統領がドール上院議員（カンザス州）と争って指名を得る（法則①）。そのまま民主党のデュカキス知事（マサチューセッツ州）を破って大統領に。

**1992年**：ブッシュ Sr.大統領がクリントン知事（アーカンソー州）に敗北。

**1996年**：ドール上院議員が候補者になるが（法則②）、返り討ちに遭う。

**2000年**：ブッシュ Jr.知事（テキサス州）とマッケイン上院議員（アリゾナ州）の対決になり、ブッシュが勝つ（法則①）。本選ではゴア副大統領を破って大統領を2期務める

**2008年**：2000年にブッシュ Jr.に敗れたマッケインの出番（法則②）。ロムニー元知事（マサチューセッツ州）を破って候補者に。本選ではオバマ上院議員に敗れる。

**2012年**：前回敗れたロムニーの出番（法則②）。本選でオバマに敗れる。

**2016年**：今まで全く無関係だったトランプ氏が候補者に。

つまり共和党は、大統領候補者の「正統性」を重んじる伝統がある。端的に言えば、「前回の予備選における次点候補者」の地位が高い。それが多少、年を取っていても問題はなくて、現にレーガン（69歳）、ドール（72歳）、マッケイン（72歳）といった高齢者を本選挙に送り出している。

こうしてみると、2016年予備選の異常さがよくわかる。本来なら今年の共和党候補者は、2012年にロムニー候補を苦しめた相手であるべきだった。しかるに2012年予備選は候補者が乱立し、ギングリッチ元下院議長やロン・ポール下院議員、サントラム元上院議員などがいたとはいえ、皆が認めるような「ナンバーツー」が不在であった。ということは、2016年の共和党は最初から正統な「後継者」を欠いていたことなる。今日の異変は、実は長い時間をかけて用意されたものだったのかもしれない。

ドナルド・トランプ氏は過去の共和党予備選挙に出馬したことはなく、それどころか共和党员でさえなかった。なおかつ一切の公職に就いたことがない。政治経験皆無ということであれば、第34代のアイゼンハワー大統領の前例があるが、こちらは第2次世界大戦の英雄であって国民的な人気があった。

ところが2016年共和党予備選においては、経営者兼テレビタレントのトランプ氏が、ベテランから若手までのプロ政治家たちを相手に終始優勢に選挙戦を展開し、史上最高の得票数で勝利してしまった。いわば単身で歴史ある政党を乗っ取ってしまったわけである。今回の党大会は、トランプ氏の勝利を確定するセレモニーであった。

## ●クリーブランドの異様な党大会

共和党大会が開催されたのはオハイオ州クリーブランド市である。エリー湖ほとりの水運で街が開け、ミネソタの鉄鉱石とアパラチア炭田を結びつけて製造業が繁栄し、かつては全米第5位の都市であったこともある。それが1960年代以降は重工業の退潮とともに衰退し、**”The Mistake on the Lake” (湖上の過ち)** などと呼ばれるようになる<sup>1</sup>。

今週の共和党大会も、これと同じ名前を呈されるかもしれない。直前に公表されたスケジュールを見るだけでも、これがいかに異様な大会であるかが浮かび上がってくる。

## ○共和党大会のスピーカーたち

( \* **青色**は予備選の対立候補、**藍色**は大物政治家、**赤色**はトランプ一家)

**7/18 Monday—“Make America Safe Again”:** *Duck Dynasty* star Willie Robertson, former Texas governor **Rick Perry**, Navy SEAL Marcus Luttrell, actor Scott Baio, Pat Smith (mother of Benghazi victim Sean Smith), Battle of Benghazi veteran Mark Geist, Battle of Benghazi veteran John Tiegen, Kent Terry and Kelly Terry-Willis (siblings of Brian Terry, killed while patrolling the U.S. border), actor Antonio Sabato, Jr., immigration reform advocate Mary Ann Mendoza, immigration reform advocate Sabine Durden, immigration reform advocate Jamiel Shaw, Rep. Michael McCaul (R-TX), Sheriff David Clarke, Rep. Sean Duffy (R-WI), U.S. Senate candidate Darryl Glenn, Sen. Tom Cotton (R-AR), Karen Vaughn (mother of fallen U.S. Seal Aaron Carson Vaughn), Sen. **Jeff Sessions** (R-AL), former NYC mayor **Rudy Giuliani**, **Melania Trump (妻)**, Lt. Gen. Michael Flynn (ret.), Sen. **Joni Ernst** (R-IA), veterans' advocate Jason Beardsley, Rep. Ryan Zinke (R-MT)

**7/19 Tuesday—“Make America Work Again”:** RNC Co-Chair Sharon Day, UFC President Dana White, Gov. Asa Hutchinson (R-AR), Arkansas Attorney General Leslie Rutledge (R), Former Attorney General Michael B. Mukasey, Businessman Andy Wist, Sen. Ron Johnson (R-WI), NRA Lobbyist Chris Cox, LPGA Golfer Natalie Gulbis, Senate Majority Leader **Mitch McConnell** (R-KY), Speaker **Paul Ryan** (R-WI), House Majority Leader Kevin McCarthy (R-CA), Gov. **Chris Christie** (R-NJ), **Tiffany Trump (次女)**, **Trump Winery GM Kerry Woolard**, **Donald Trump, Jr. (長男)**, Sen. Shelley Moore Capito (R-WV), **Ben Carson**, actress Kimberlin Brown

**7/20 Wednesday—“Make America First Again”:** Radio host Laura Ingraham, businessman Phil Ruffin, Florida Attorney General Pam Bondi (R), astronaut Eileen Collins, businesswoman Michelle Van Etten, Kentucky State Senator Ralph Alvarado, Jr. (R), Pastor Darrell Scott, businessman Harold Hamm, Gov. **Scott Walker** (R-WI), Trump family personal assistant Lynne Patton, Sen. **Marco Rubio** (R-FL), Sen. **Ted Cruz** (R-TX), **Eric Trump (次男)**, Former Speaker **Newt Gingrich** and his wife Callista, Gov. **Mike Pence** (R-IN) = **副大統領候補**

**7/21 Thursday—“Make America One Again”:** Motivational speaker Brock Mealer, Rep. Marsha Blackburn (R-TN-7), Gov. Mary Fallin (R-OK), **National Diversity Coalition for Trump member Dr. Lisa Shin**, RNC Chairman Reince Priebus, Evangelical leader Jerry Falwell, Jr., businessman Peter Thiel, businessman Tom Barrack, **Ivanka Trump (長女)**, **Donald Trump** = **大統領候補**

---

<sup>1</sup> クリーブランド市の名誉のために付け加えると、近年では都市再生の努力が成果を挙げて”Comeback City”とも呼ばれるようになっている。ちなみに来週、民主党大会が開催されるペンシルバニア州ピッツバーグも、ほとんど同じような歴史と評価をたどっている。

まず、ブッシュ一家が誰一人顔を出していない。2008年の候補者であったマッケイン上院議員や2012年のロムニー元知事など、党の重鎮が姿を見せない。さらに全米から、ゲストを迎える立場である地元オハイオ州のケイシック知事も居ない。

事前には、「政治家が少ない分だけ、芸能人やスポーツ選手を招く」という噂も流れたが、それにしたって「大物」は呼べなかったようである（前回の2012年大会ではクリント・イーストウッド監督が演説している）。

逆に目立つのはトランプ一家である。大統領候補の妻が登場するのは、毎度おなじみの「お約束」だが、それも「演説の盗作疑惑」でミソを付けてしまった。子どもたちも総出演で、それも長男、長女、次女の3人はThe Trump Organization社の役員であるからいいとして、次女のティファニーなどは22歳のモデルである（美人だが）。加えて、トランプ関連企業の「使用人」と思しき人物までノミネートされている。これだけ「ファミリー優先」では、党の結束を強めることなどほとんど不可能ではないか。

案の定、3日目に壇上に立ったテッド・クルーズ上院議員は、最後まで「トランプ支持」を明確にしなかった<sup>2</sup>。そしてマルコ・ルビオ上院議員は欠席し、ビデオでの出演となった。討論会の席上などで、“Lying Ted”（嘘つきテッド）とか“Little Marco”（ちびマルコちゃん）などと何度も呼ばれた恨みは、簡単に消えるものではないのであろう。

共和党内の亀裂を修復することは、容易なことではないのである。

## ●プラットフォームも苦心の調整作

トランプ候補があまりに無茶な公約を乱発したために（そしてそれらがウケてしまったために）、党としての政策綱領（Platform）をどうまとめるかが至難の業となった<sup>3</sup>。

PDFファイル58ページを拾い読みすると、突っ込みどころが満載で面白い。以下、注目度の高い政策をピックアップしてみよう。

### \* 通商政策（A Winning Trade Policy—P2）

自由貿易反対、とか保護主義を、などとは言っておらず、国益に資するような通商交渉をしろ（We need better negotiated trade agreements that put America first）とだけ言っている。TPPという言葉は1回も使われていない。

ただし最後の1行に、“Significant trade agreements should not be rushed or undertaken in a Lame Duck Congress.”（重要な通商合意はレイムダック議会で性急に諮るべきではない）とある点は注意が必要だ。「大統領選終了後の12月に、サクッとTPP批准」という期待は、どうやら望み薄のようである。

<sup>2</sup> “Cruz Control”は失敗したが、トランプ氏は“No big deal!!”（構わん！）と大人のツイートをしている。

<sup>3</sup> <https://www.gop.com/the-2016-republican-party-platform/>

**\* 移民政策 (Immigration and the Rule of Law—P25-26)**

前段部分でテロや麻薬、犯罪組織などのことを強調し、だから南の国境に壁を作ることを支持する (That is why we support building a wall along our southern border and protecting all ports of entry.) と言っている。「メキシコ」とは特定しておらず、もちろん「カネを払わせる」なんて下品なことはもちろん言及していない。

さらに後段の外交政策に関する部分では、妙にメキシコを持ち上げる部分があったりして面白い (The Mexican people deserve our assistance as they bravely resist the drug cartels that traffic in death on both sides of our border.)。さすがに気を遣っているのであろう。

**\* 規制政策 (Regulation: The Quiet Tyranny—P27-28)**

主に規制緩和の必要性を述べているのだが、環境規制、医療規制などに続いて、金融規制も槍玉にあげている (The Dodd-Frank law, the Democrats' legislative Godzilla, is crushing small and community banks and other lenders.) ドッド・フランク法は「民主党が作ったゴジラ」だそうである。ところがその後突然、「われわれはグラス・スティーガル法を復活させる」と (We support reinstating the Glass-Steagall Act of 1933 which prohibits commercial banks from engaging in high-risk investment.) と来る。論理矛盾もいいところである。

おそらく、民主党内で金融規制強化の論陣を張っていたバーニー・サンダース候補の支持票を取り込むために、後から唐突に追加したのである。こうしておけば、本選挙では「ヒラリーはウォール街の手先だ！」と非難することができるという思惑である。

**\* アジア政策 (U.S. Leadership in the Asian Pacific—P48-49)**

共和党のプラットフォームでは、アジア太平洋地域の同盟国の名を挙げて謝意を述べるのが「吉例」となっている。今年は”treaty alliances with Japan, South Korea, Australia, the Philippines, and Thailand.”という順序で、いつも通り日本が先頭に来ている。もちろん、「駐留経費をもっと払え!」などとは書いていない。

その後の部分では、台湾に関する記述が 23 行も続いている。中国との衝突があった際には、「米国は台湾関係法に基づいて、自衛する台湾を助ける」 (the United States in accordance with the Taiwan Relations Act, will help Taiwan defend itself.) など、こういうときのお決まりの文句 (ただし最近はあまり聞かなかった) が並んでいる。

その後の部分で中国について触れているが、言葉遣いが非常に厳しい。”the cult of Mao revived.” 「毛沢東のカルトが復活した」とか、”The complacency of the Obama regime has emboldened the Chinese government and military to issue threats of intimidation throughout the South China Sea” 「オバマ政権の怠慢さにより、中国政府と軍は南シナ海全体を恫喝している」などと喧嘩を売っている。こういう過激な文言が最終稿に残っているということは、たぶん十分な時間がなくて推敲の機会が少なかったのであろう。

## ● 共和党とトランプは折り合えるのか

以上、トランプ候補の無理目な公約に対し、政策綱領はギリギリのところ現実と折り合いを付けようとしている。おそらくは党主流派が目を見詰めていて、プラットフォーム起草チームが調整に汗を流したのであろう。そしてトランプ氏自身は、たぶんこんな文書にはいちいち目を通していないに違いない。

トランプ氏という型破りな人物が、歴史あるリンカーンとレーガンの政党の候補者に収まるためには、ほかにもさまざまな努力が必要であった。

マイク・ペンス知事を副大統領に指名したこともそのひとつであろう。トランプ氏自身は戦友(?)であるクリスティー知事に傾いていたようだが、それでは共和党本流派とのパイプが作れなくなってしまう。ここは是非、下院議員 12 年の経歴があり、ライアン下院議長との関係が良く、さらに共和党への大口献金者であるコッチ兄弟ともつながりを持つペンス氏である必要があった。年齢バランス(トランプ氏 70 歳に対して 58 歳)、地域バランス(中西部の製造業州であるインディアナ出身)なども申し分ない。ついでに言えば、あらゆる面でユニークな選挙戦を展開してきたトランプ氏が、「意外とまっとうな副大統領候補選びをした」ことも、党内を安心させる効果があったことだろう。

もっとも、党大会の最終日である 21 日に行われた肝心の大統領候補受諾演説を、ユーチューブで実際に聞いてみると、「グローバリズムからアメリカニズムへ」「TPP で米国は外国政府の支配下に置かれる」「米国が防衛する国々に対して相応の負担を求める」「国境に巨大な壁を建設する」などと、いつもの通りの言いたい放題であった<sup>4</sup>。党との折り合いをつけるために、持論を曲げるつもりはさらさらなさそうだ。そしてまた、彼自身はこの路線で人気を得てきたのであるから、今さら党に遠慮する理由はないのである。

こうしてみると、今の共和党を結束させることができるのは、唯一、「ヒラリーには勝たせたくない」という共通点だけであろう。序盤戦で予備選挙をリタイアしたスコット・ウォーカー知事(ウィスコンシン州)が 3 日目の演説で述べたように、「トランプ氏以外への投票は、ヒラリー・クリントンへの投票だ」という理屈である。同じ理屈は民主党側にもあって、つくづく 2016 年は嫌われ者同士の対決なのである。

とはいえ、2016 年選挙が終わった(たぶん民主党が勝った)後は、共和党は分裂が避けられないのではないだろうか。①共和党主流派はライアン下院議長などを中心に党の再生を図ろうとするが、②トランプ支持者たちはなおも勢力を維持し、どうかすると長女イヴァンカ・トランプを次の候補者に担ごうとし、③保守派テッド・クルーズは 2020 年に向けて我が道をゆく…といった未来図が浮かんでくる。

「トランプ劇場」は、そう簡単には終わってくれそうには思えない。

<sup>4</sup> <https://www.youtube.com/watch?v=BXmqiESZYp0>

## <今週の The Economist 誌から>

”The dividing of America”

「分断されるアメリカ」

Cover story

July 16<sup>th</sup> 2016

\*“The Economist”誌がカバーストーリーでトランプ批判を展開するのはこれが何回目か  
…しかるにトランプ支持者には、まったく届いていないのでありましょう。

<抄訳>

「米国にまた朝が来る」から「イエス・ウィキャン」まで、米大統領選挙は楽観主義が基調であった。2016年は様子が違い、悲観に包み込まれている。白人警官がダラスで黒人に狙撃され、黒人による抗議運動が逮捕者を出す。経済については左右の政治家たちが、米国の資本主義は身勝手なエリートに操作され、普通の人々を救えないと訴えている。

問題はあるにせよ、この国の繁栄と平和と人種差別は以前より改善している。真の脅威は国民的怒りに火をつけ、クリーブランドの党大会で共和党候補者としての指名を受けるドナルド・トランプにある。11月に勝っても負けても、米国を変えてしまいかねない。

陰鬱な評価と実体との落差は、経済において極まっている。景気拡大は史上4番目の長さで、株価は史上最高値、失業率は5%以下で中央値の賃金もようやく上昇し始めた。そして格差とグローバル化に取り残された労働者の問題は、今に始まったことではない。

人種問題はむしろ前進している。1995年の調査でさえ、異人種間結婚を支持する米国民は半分だけだった。今ではそれが9割となり、結婚の10件に1件は異民族間である。非白人が郊外に移り住むようになり、今では溶け合っている。ところがオバマ大統領が当選した2008年以降、白人と黒人の関係が良好とする意見は68%から47%に減っている。

現状と認識のギャップはどこから来るのか。2011年には白人と非白人の子どもの数はほぼ同じだったが、白人人口の高齢化に伴って2045年には半数を割り込む見込みである。建国から約200年間は、欧州の白人の子孫が社会の8~9割を占めていたのだが。

人口動態の不安は政治の党派性によって強化される。二大政党の支持者は互いにほとんど重ならない。だったら支持者を怒らせる方が得票率は上がる。これにトランプ流の虐めが加わる。彼が大統領になれば打撃は大きい。通商協定を破棄して米国に雇用を取り戻すという中身は空っぽだ。メキシコ国境の壁は作れず、1100万人の不法移民を追い出すこともできない。これらの公約が守れなくても、すでに米国の評判は地に堕ちている。

トランプ政権誕生の最大の懸念は、自制心が乏しく短気な人物による決定が国家安全保障問題で下されることだ。世界最強の陸海空軍が、核兵器とともにその指揮下に入る。

ブックメーカーによればトランプの勝率は3割程度で、これは英国のEU離脱のときに近い。負けたとしても打撃は小さくない。既にメキシコ人やイスラム教徒、女性、独裁者たちとの関係を悪化させている。過去の歴史が示すところでは、党の伝統的価値観に挑戦した候補者はしばしば党の流れを変えている。ゴールドウォーターは1964年に大敗したが、共和党は後にその政策綱領を引き継いだ。1972年のマグガバンも同様である。

トランプ氏の成功から得られる教訓は、小さな政府と社会的保守主義は予備選ではもはや人気がなく、21世紀型のリアリティTVやSNSに沿ったトランプ流ポピュリズムには勝ち目がないことだ。彼が指名を受けるのは共和党が袋小路に入ったことを意味する。

トランプ候補への一票は現行システムへの抗議を意味する。それで何を失うかを問う有権者も居るだろう。それは6月23日の英国EU離脱投票と同じ構図である。だが2016年の米国は平和で繁栄し、人種間の宥和も進んでいる。だからこそ恐ろしい。

## <From the Editor> 中道政治は難しい

前回の6月24日号「Brexit：開票速報を聞きながら…」もそうでしたが、今週も同時進行の共和党大会を横目で見ながらの執筆となりました。疲れますけれども、本誌としてはこれを取り上げないわけにはいきませんよね。

つい先ほどまで、トランプ氏の受諾演説を延々と聞いておりました。70歳とは言え、あれだけテンションの高い演説を、あんなに長時間にわたって続けるわけですから、気力、体力ともに敬服するほかはありません。ただし内容的には明らかな間違いで、あの通りのことをやったら米国は確実におかしくなるでしょう。保護主義はいけませんし、壁だって作るべきではありません。ところが聴衆は歓呼で応え、「USA、USA」という合唱が何度も起きました。聞いていて、どんどん憂鬱になってしまいますな。

とはいえ、これこそが同時代の米国政治の最前線である。「トランプはどうせ負けるだろうから、ほっといていいよ」などと言ってもいられない。米大統領選挙に執心し続けてきた本誌としても、とことん付き合うほかはありません。

ところで今週は、刊行されたばかりの『ビル・クリントン』（西川賢著／中公新書）を読みました。『レーガン』（村田晃嗣／同）が1980年代を愛情込めて描いていたように、90年代を懐かしく思い起こさせてくれる好著です。この西川氏の指摘が面白い。

90年代のクリントン政権は、米国経済に未曾有の好況をもたらし、現実路線の外交でも一定の成果を挙げた。しかるにクリントン大統領の中道政治が成功し過ぎたことで、21世紀の民主党は左に旋回してしまう。その延長に現在のオバマ政権があり、本来は「ひとつの米国」を目指していたはずなのに、イデオロギー的な分断をより激しくしてしまった。

実は同じことが共和党側でも起きていた。1950年代のアイゼンハワー大統領による中道政治が成功を収めたために、その後の共和党の保守化路線が始まっている。1964年には保守派のゴールドウォーター候補が大敗し、それが後年のレーガン政権につながっていく。実は左右対称形のメカニズムが働いていたというわけです。

米国政治の党派色の広がりについては、メディアの変容から選挙区割りの問題までいろんな理由付けが行われていますが、「いやいや、中道路線の成功を定着させるのは意外と難しい。それだけのことですよ」と言われると、これはもう脱帽するほかはありません。

本書の終章は、「この激しい党派対立の結果、政治は行き詰まりを迎え、アメリカの民主主義は危機に瀕しているといつてよい」と結論しています。眼の前のトランプ現象は、その表れということになる。さて、これから先はどうすればいいのか。

今後、共和党が分裂して第3政党が誕生するときに、事態解決の糸口を提供してくれるような予感がしています。ピンチはチャンス、トランプ現象が米国政治を救う。はてさて、そんなうまい話になりますかどうか。

\* 次号は2016年8月5日（金）にお送りします。

編集者敬白

---

本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、双日株式会社および株式会社双日総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問い合わせ等は下記までお願いします。

〒100-8691 東京都千代田区内幸町 2-1-1 飯野ビル <http://www.sojitz-socket.com/>

双日総合研究所 吉崎達彦 TEL:(03)6871-2195 FAX:(03)6871-4945

E-MAIL: [yoshizaki.tatsuhiko@sojitz.com](mailto:yoshizaki.tatsuhiko@sojitz.com)